

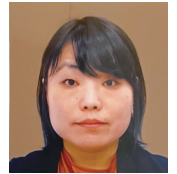
SDGsの視点から見た建築・保育環境

スウェーデンの事例から

第4回(最終回)

子育て支援を支える建築環境

浅野由子 | 日本女子大学家政学部児童学科 専任講師



はじめに

スウェーデンの社会保障の充実の現状は、これまで第1回から第3回までの連載で述べてきたが、少子化対策の観点から、働く保護者の育児休暇制度の充実や父親の子育て参加の義務化等、スウェーデンの子育て支援政策には今後の日本の子育て環境に示唆を与える事項が多い。たとえば、両親休暇は18カ月、うち480日間(16カ月)は両親給付を受け取ることができる。また取得の年齢として、子どもが8歳になるまで休暇を取れる等、融通性があることも特徴である。特に、父親にとって、3カ月(90日間)の育児休暇は義務化されていることから、取得しない場合は休暇日数が消滅するため、制度的に子育てへの男女平等意識が向上している現状がある。

こうしたことからスウェーデンでは、育児休暇中の父親同士が楽しそうにベビーカーを押して歩きながら公園でおしゃべりしている光景が微笑ましい。実際に、スウェーデンの2017年の合計特殊出生率は1.78で、EU諸国の中でも常に上位を保っている。

このように、子育てしやすい国として、スウェーデンは世界的にも注目されている^[註1]。

開放型保育所 (Oppen Förskola) の環境

そうした子育て支援を支えている施設として、まず最初に紹介したいのは、開放型保育所 (Oppen Förskola) である。

この施設は、特に専業主婦が地域での子育て支援を求めて訪問するところである。スウェーデンでは、約9割の母親が働いていることもあり、通常育児休暇明けの満1歳から預けることのできる就学前学校 (Förskola) に行くことが多い。しかし、専業主婦や主夫に

とっては、子どもや保護者の仲間をつくる上で、子育て支援センターのような施設は必要である。そういった子育て支援センター的な施設がこの開放型保育所であるが、通常、就学前学校 (Förskola…1~5歳) に併設されていることが多い。ここでは、就学前学校教諭 (Förskollärare) や保育士 (Barnskötare) が、保育を担っていることが多い。

日本でも、幼稚園や保育所、認定こども園での子育て支援機能が法律で義務化され、各施設で子育て支援事業を行っているところが多いが、スウェーデンでは、開放型保育所が建築的に就学前学校に併設されていることが多いので、地域の子育て支援機能が空間的に保障されている。ここでは、外国籍ルーツを持つ子どもたちやその保護者の利用も多く、スウェーデン語を母国語としない子どもたちや保護者へのプログラムが平行して行われていることも多い。たとえば、各曜日の活動内容を紹介した壁面には、月曜日は音楽の活動、火曜日はお料理の活動、水曜日は言語の活動、木曜日は保健所の看護師を交えた音楽の活動、金曜日は看護師を交えて近くの公園に散歩をする等の運動の活動、というプログラムである。多様な言



写真1 開放型保育所の壁面には、曜日ごとの子どもの活動がわかりやすく掲示されている



写真2 学童保育クラブでは、子どもたち同士が、ソファに座ってくつろぎ、FIKA (お茶)の文化に親しみながら、おしゃべりを楽しんでいる

語環境に適応した絵本コーナーは、移民の子どもと大人にとっても大切な空間となっている【写真1】。

学童保育クラブ (Fritids) の環境

次に紹介するのは学童保育クラブ (Fritids) の環境だが、近年需要が高まっている日本の学童保育の現状に参考になるものである。

スウェーデンの学童保育クラブは、2015年以来、政府がクラブ数を増加させるための政策を示してきた。そのため、スウェーデンの学童保育クラブは、すべての子どもが利用可能な状態で、ほとんどの基礎学校 (小学校・中学校) 内に配置されている。基礎学校 (小学校・中学校) の主体は学童保育クラブの管理者の地位を保持しており、学校と学童保育クラブは互いに協働している。そのため多くの公立学校の基礎学校には、教室に学童保育クラブが併設される空間を提供しており、子どもがその空間を学校時間の延長として使用できるように整備されていることが多い。ここには必ず学童指導員 (Fritids pedagog) が配置されており、この資格は教師の一種として意図され、教員免許同様、大学の単位を取得して得られるものである。通常、基礎学校の学級の副担任として勤務する。

クラブの内部は、子どもが長い時間をリラックスして過ごすことができるよう家庭のように設計され、放課後の時間に保護者が子どもを安心して預けることのできる空間を率先して提供している【写真2】。

保育料は、月単位で1,000KR (約1万円)を支払い、保護者が帰宅する夕方まで、子どもは基礎学校の校庭や学童保育クラブで遊んでいる。日本では、学童保育の部屋で子どもが宿題を行っている光景をよく見かけるが、スウェーデンではそうした光景を見ることは稀である (学校で日本ほど宿題を出されることはない)。

学童保育クラブの部屋には、必ずと言ってよいほど、国連の子どもの権利条約の第31条「遊びの権利」を守る意味でのポスターが貼られていることが多く、子どもが多種多様な遊びを行っている。たとえば、カード・ボードゲーム、音楽、トランプ、お菓子づくり、製作といった活動である。



写真3 音楽室も整備されており、芸術に親しむような時間と空間が設定されている

学童指導員にもそれぞれ得意分野があり、活動内容にも多様性がある。学童保育で夏休みや冬休みを利用して、自然の豊かな場所や芸術に触れる活動を織り交せて、子どもの余暇活動の充実にも力を入れている【註2、写真3】。

コレクティブハウジング「ストールプリッカン」の環境

さらに、首都のストックホルム市から南西に位置するスウェーデン第5番目の都市である、リンショーピン市のコレクティブハウジング、ストールプリッカンにおける子育て支援の建築環境の事例を紹介しよう。

このコレクティブハウジング (集合住宅) は、1970年代後半に女性の労働運動から、女性が働きやすく、また子育てをしやすくする環境を求めて、1979年に設立されたものである。歴史的には、デンマークのバンク・ミケルセンにより提唱された「ノーマライゼーション (統合)」の理念により、1969年にスウェーデンでは、ニイリエによりノーマライゼーション原理として成文化された。その後、リンショーピン市は、高齢者、児童、そして障がい児の社会福祉サービスを含む集合住宅として、コレクティブハウジング、ストールプリッカンを



写真4 コレクティブハウジング (ストールプリッカン) の玄関

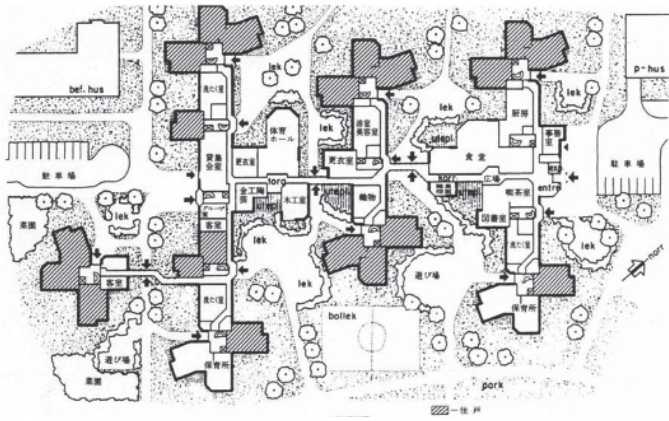


図1 1979年に開所された「コレクティブハウジング・ストールブリクカン」の1階平面図(設計者…ヤン・ヘイヤー、所有形態…市が出資している企業体(第3セクター所有))(出典…小川信子『スベリエ手帖』、ドメス出版、1991年)



写真5 コレクティブハウジングの保育園の園庭

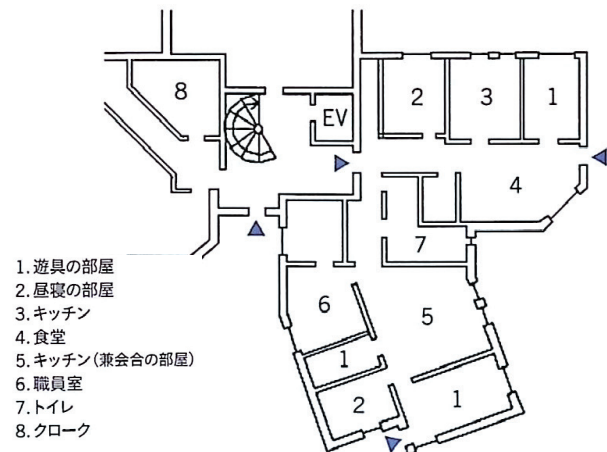


図2 コレクティブハウジング(ストールブリクカン)内にある就学前学校の平面図



写真6 コレクティブハウジングのコンポストの機械

1979年に建設したという【註3、写真4、図1】。リンショーピング市の大地主、"Stångåstaden (ストンゴースターデン)"が、135世帯のアパートメントを賃貸している。

その中の35世帯は、特別な部屋と公共機関(就学前学校・コモンダイニング・高齢者施設・余暇活動施設・赤ちゃんカフェ)である【図2、写真5】。80年代には基礎学校(日本の小学校と中学校)や学童保育施設もあったが、2003年には基礎学校の利用者が10人程度しかなくなったため閉鎖され、近隣の基礎学校に統合されたという。基礎学校の跡地は知的障害者施設となり、下の階には介護の担当者が常駐しているケアハウスがあり、そこにはアスペルガー、ADHD(注意多動性症候群)などの障害を持つ人が居住している。

施設には、余暇活動の場として体育館や音楽室、美術室、工作室があり、十分に親しめるような建築環境となっている。また、家庭やコモンダイニングから出た生ごみを共同のコンポスト機【写真6】で集めて堆肥にして、共同の家庭菜園を楽しんでいる。

コレクティブハウジングでは共有空間を多くつくり出すことにより、エネルギーを有効活用している。たとえば、暖房費、交通費の節約ができ、人と環境に優しい生活ができる。特に、コレクティブハウジングの中心となるのはコモンダイニングである【写真7】。このコモンダイニングでは、住民が交代で食事の準備係をするほか、施設に住んで

いる老人と保育園の子どもたちがともに利用するため多世代交流の場ともなる。家で食事をつくるのが難しい場合はテイクアウト制度もあるため、子育て世代にとっては大変便利である【註4】。

またリンショーピング市の就学前学校や基礎学校では、2010年3月～2012年12月までの間、スウェーデンの4地域間の共同プロジェクト(自治体・企業・学校・NGOが連携)として、KNUTプロジェクト——知識(Kunskap)・自然(Natur)・技術(Teknik)・発展(Utveckling)というエネルギーと資源に関する教育を行っている。

子どもたちの興味と知識・関心を促進する目的の当開発プロジェクトは、天気や自然現象に自然と馴染めるような環境を壁面に多く取り入れ、水、エネルギー、植物生育モデルを感じられる多くの教材を、子どもの視界に入りやすい位置に設定している。教育的ドキュメンテーション(記録)の考え方も取り入れながら、保育の質を向上させる工夫もみられる【註5、写真8】。

最近では、リンショーピング市の中心部には、子育て世代をターゲットにし、住みやすいまちづくり計画として、意図的に住みやすいまちを建設する動きもある。たとえば、各団地内にコミュニティの場として集会場を建設し、子どもたちの遊び場を充実させることで、人々が憩う空間づくりを率先的に行っている。



写真7 コモンダイニングでは、就学前施設の子どもとご老人が、食事を一緒に楽しむ時間も設定されている



写真8 コレクティブハウジングの就学前学校では、地域のプロジェクトとして、子どもが自然環境に親しみが持てるような空間をつくり出している(子どもの視点で空間的な配置がされている)

まとめ

以上のように、スウェーデンにおいては、子育て支援を空間的に整備する環境を半世紀前から考慮していたことがわかる。女性が安心して子育てしながら働ける環境を用意するには、SDGs(持続可能な開発目標)の理念として重要なキーワード「誰一人として取り残さない」住宅政策、つまり、国際性(外国籍ルーツを持つ子どもや保護者)や多様性(子ども、若者、老人、障がい者)を保障する生活空間を保障していくことが求められる。そして、そういった社会政策だけでなく環境政策(二酸化炭素を排出しない環境を配慮した生活様式)、経済政策(社会保障、児童手当、住宅手当)といった総合的な視点も、必要不可欠であると言える。

註1 Statistikdatabasen - Välj tabell (scb.se)

https://www.statistikdatabasen.scb.se/pxweb/sv/ssd/START__BE__BE0101__

註2 須郷詠子、浅野由子、小池孝子、定行まり子「スウェーデンにおける学童保育施設環境の特性」(こども環境学会学会誌編集委員会編『こども環境学研究』13(3)、31-37、2017)

註3 Karen A Franck, Sherry Ahrentzen (1989) "The Service Model in Public Housing and Goals of Integration" New Households New Housing, New York: Van Nostrand Reinhold.

註4 浅野由子、定行まり子、小池孝子「持続可能性の為に必要な子どもの環境(人的・物的環境)とは、何か?—スウェーデンと日本の調査比較から」(日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科 第20号、2014)

註5 Knut Project "ENERGI&KLIMAT FOR UNGA" 2013 (KNUTプロジェクト、「若者にエネルギーと気候を」)

あさの・よしこ

1999年日本女子大学家政学部児童学科卒業。2008年同大学大学院人間生活学研究科人間発達学専攻博士課程単位取得退学。2015年スウェーデンウプサラ大学持続可能開発センタープロジェクトマネージャー。2018年ウプサラ市私立マルマパッケ就学前学校教諭。2020年より現職。博士(学術)

自習型認定研修の設問

設問1

スウェーデンの学童保育クラブは、基礎学校(小学校・中学校)のどの施設と併設されていることが多いか。

- a. 体育館
- b. 工作室
- c. 教室

設問2

1970年代にスウェーデンを中心に建設された集合住宅(コレクティブハウジング)は、どのような理念を、特に大切にしているか。

- a. 合理性
- b. 統合性
- c. デザイン性



認定教材の設問への回答は、CPD 情報システムのページ

<https://jaeic-cpd.jp/>

にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。

※自習型教材の選択欄における会誌「建築士」選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみの表示項目になります。